



4月 ちとせだより

新しい年度を迎えて、新入園児の子どもたちは少し不安な気持ちを、また進級する子どもたちは少しお兄さん、お姉さんになった気持ちを感じているかも知れません。そしてその保護者の方々の気持ちもまた様々でしょう。

キリスト教保育連盟は、今年度の年主題を昨年度と同様に「あふれる愛」と決めました。子どもたちは、神様から一人ひとりが愛されてその生命を授かり、この世界に生まれてきました。親にとってその喜びは、人生で初めて経験するものでもあり、また親だけが経験できる素晴らしいものです。そして、その子どもを守り育てていく行いは、親や家族の愛情に満たされたものであるはずですが、ともすればその愛情の表現も、本当に子ども自身の成長に役立っているかというとそうでない場合も多くあります。ある時には、過保護や過干渉になっていたり、また親の自己満足や自分自身が果せなかった夢を託すことになっていたりすることもあり、親は親として子どもをどう育て、どう親子の関係を築いていくのかが問われています。

すべてを親に頼っていた子どもが、初めて自分の力を使って過ごす場が幼稚園ではないでしょうか。親としては、「ちゃんとやっていけるだろうか」「寂しくて泣かないだろうか」等と心配するのですが、幼稚園は親と一緒にいて面倒をみる環境ではなく、子ども自身が自分の力で生活し、また様々な問題も自分で解決することが出来るようになるための環境であることを忘れてはなりません。確かにすぐに新しい環境に適応できる子どもばかりではありません。しかし、そんな中でも子どもたちは周囲を観察し、どうすれば良いのかを一人ひとりが考えています。常に行動を指示されていたり、欲しいものや必要なものを与えられたりするのではなく、子ども自らが考えて行動に移していくことに意味があり、そのためには時間も必要なのです。つまり、子どもにとっては、何でもすぐ出来るようになる効率の良い育て方はないのです。

子どもたちは、生まれながらに神様から与えられている自ら成長する力を持っています。そして、親は「子どもは何も出来ない」「何も分かっていない」と考えるのではなく、子ども自身が持っている自ら成長していく力を信じて見守ることが出来るかどうか、また将来に渡る親子関係の基礎となっていくのです。

様々な子育てに関する情報があふれる現代であるからこそ、子どもを本当に愛するとはどのようなことなのかといった課題が親に突きつけられているのです。子ども自身が自らの力を使って歩みだし、自らが経験し、自ら成長していくことを支え見守る愛情、そしてどんな時でも子どもが安心して甘えられる親であることの意味を忘れないでこの一年も始めたいと思います。

年主題 「あふれる愛」

<年主題聖句> 「信仰と、希望と、愛、この三つは、いつまでも残る。

その中で最も大いなるものは、愛である。」

(コリントの信徒への手紙 13章 13節)